

特集・状況展望 PART I 琉球弧にて ヤマト帝国主義は 黒潮に逆らって…

神話の メッセージ



ここに一枚の絵がある。

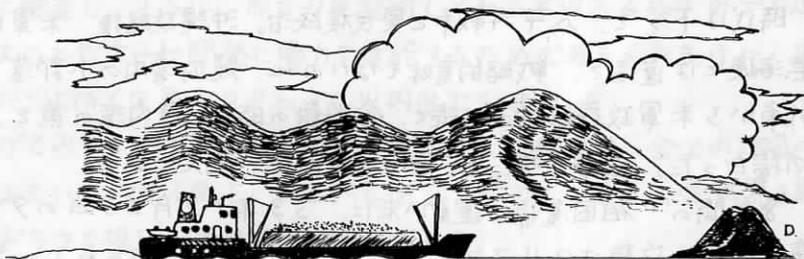
インド神話ラーマ・ヤーナの悲劇的クライマックス、魔王ラーヴァナが、大地の娘、神の化身ラーマの妃、シーターをひっさらっていく情景である。

ラーヴァナは、計略のうまい頭を十も、力強い腕を二十本も持っている。頭には冠。顔は自己満足で火照っている。体を飾りつける宝石。二十本もある手には、兵器と富。ラーヴァナの姿は、権力の本質をズバリ突いている。

ラーマ・ヤーナは、インド人民大衆が、苦しみを訴し、解放の時を待ちつつ、何千年にも渡って、想像力豊かに紡ぎあげ、現代にまで伝えられた物語だ。そこには、時代を超えた普遍性がある。

例えば、四頭の天馬。エネルギーギッシュだが、無統制である。これは、伝統的には、4つの欲望、すなわち、支配欲、名誉欲、財産欲、そして性欲を表現している。だが自由に解釈してみれば、現代巨大産業都市文明がヤミくもに欲しがる、石油・原子力エネルギーにも、イメージが重なるではないか。

ひるがえって、私たちが生きている時代状況を、広い視野と、深い探究心とで、無心に見つめてみよう。そこに、神話的現在ととも称すべき物語が展開している。



月宮殿 からの展望

私たちが枝垂久島鳥帽子山頂上(322m)で見た、ひとつの啓示のことから話してみよう。そこには、^{ミヅテ}月宮殿の拜所が築かれている。中央に三角示標柱、東西南北に4つの石、そして石積の祭壇から成る、聖域の、あろうことが、どまんなか、一本のコンクリート杭が突ったっていた。「中ペ」のマーク。北ネサツマは川内市に所在する、中越パルプの標識

である。

神の座に侵入した一本の爪！ それは、今や地球生態系そのものを破滅に追い込もうとしている、現代物質主義文明の、貪欲で蒙昧な本質を象徴している。

「南無(とうとがなし)枝手久大明神！」 聖域を清めつつ、私たちは、神話的現在のまっただなかに生きている、と実感した。

標高322mの高みから眺望した、魚里のたたずまいは、まるで、メルヘンの里だ。亜熱帯ジャングル。海岸の寄せ波。珊瑚の海底。青い明暗スペクトル。小舟の航跡。湾岸に迫る急斜面。人里の煙。緑の山並。青空に流れ雲……。県道の坂道を巡る集材トラックさえもが、まるで、おもちゃだ。

しかし、神話的現在はメルヘンサユートピアの類いではない。それは、風景のなかに、深々と拓がりを持って、展開する歴史であり、現実であり、展望である。

枝手久島頂上は、その昔、サツマの軍事侵略の時代、焼内湾人民の見張り台だった。焼内(打)湾の名にも、全村に火を放つまで、侵略軍に抵抗した、当時のムガリ者たちの想いが込められている。

枝手久島の山腹に踏み入ってみれば、生命力旺盛な亜熱帯樹林の下には、魚里の民の歴史が眠っている。

サツマの圧政、奴隷的な糖キロ単作強制と、苛酷な黒糖徴収、文字通りの黒糖地獄を生み延びるために、魚里人民は、ハブ登詳伝説のこの島に、毎日、板付舟で渡って、谷筋には水源間近まで棚田を、斜面には中腹超えて投り畑を、幾世代にも渡って、拓き、耕してきた。

黒糖独占販売は巨大な利益をサツマにもたらし、西郷隆盛の軍資金となった。近代ヤマト天皇主義国家の発点、1868年7-7(明治維新)は、奄美群島からの植民地収奪を基盤として達成されたのだ。世替りとなっても、サツマは鹿児島県立産社による黒糖収奪を続け、藩閥政治資金とした。

時代は下って、太平洋戦争と異民族統治。沖縄攻略後、米軍は、帝国海軍基地だった大島海峡とは違って、戦略的意味もないのに、焼内湾内の小部落をも空襲したそうである。戦争から米軍政府統治へと続く、食料難の時代、焼内湾の魚と、枝手久島の芋とが、生命の糧だった。蘇鉄^{ソテツ}も喰った。毒でやられて、死人も出た。

8年間の「祖国復帰」運動の末に、'53年12月25日のダラス声明で、沖縄に先立ち、奄美群島施政権はクリスマス・プレゼントとして返還された。それは、サツマの黒糖収奪に代る、ヤマト産業都市文明の人間収奪の始まりだった。昨年12月、「祖国復帰25周年式典」が、にぎりにぎしく催されたが、実状は、放ったらかしと若者収奪の、「強制された低開発」の25年間である。

幾世代にも渡る呻吟と労苦の結晶であり、祖伝からの贈り物である、枝手久島の耕地も、押し迫る過疎高齢化には抗しきれず、いつしか耕作放棄され、野生の生命力が繁茂するに

まかせられた。大樹の根に貫かれた時、急斜面に崩れる石垣、木洩れ日を頼りにようやく生きていく蘇鉄の防風林。魚里人民史の風景である。

沖縄返還の翌'73年、奄美に突きつけられた、東亜燃料工業(エクソン系:社長松山彬は鹿児島県人!)の枝手久島石油基地計画は、地域社会を見殺ししてきた果の、新たな侵略である。国内植民地への公害侵略である。和歌山県有田工場の日産7万バレル増設計画が、公害防止を巡って紛糾したので、見送って、代りに奄美に、それも世界最大50万バレル精製基地計画を、無公害(?!?)の触れ込みで、押し付けたのだ。「ハブは亜硫酸ガスに弱いので、ハブ対策にもなる。」(某村会議員) ハブと云うか、人間も住めなくなるだろう。山林は立ち枯れるだろう。油の海になるだろう。

魚里の自然は清らかに澄んでいる。しかし、つぶさに見れば、ずさんな道路工事、山林伐採、赤土の流出、チップ工場廃液、砂利採取、合成洗剤、オイル・ボール、オニトデ。汚染は既に進行しているのが実状である。

林業、すなわち山林伐採は、綿、工建業に並んで、串検村の主要産業である。だが、湾奥3ヶ所のチップ工場はヤマト資本



海岸のオイル・ボール除染作業。タンカーからの流出を止めないで行われる、国策予算に足らない「公害対策」。(寺前 タリとポン)

の経営であり、買ったたかれた山林代金、日雇い賃金の他は、山林の富は全てヤマトへ持ち込まれる。ここにも収奪の構造が貫かれている。

湾奥から出港してくるチップ船の跡を追ってみれば、川内市に向っている。そこでは、中越パルプが川内川河口部を汚染している。しかも、九州電力が、西部臨海エネルギー基地と称して、火力発電所を操業し、さらに、原子力発電所(96万KW×2基)の一号炉を着工した。志布志湾巨大コンビナート開発に電力を供給するためである。おまけに、原発着工とともに、自衛隊施設大隊(定員500名)の川内進出も決定。

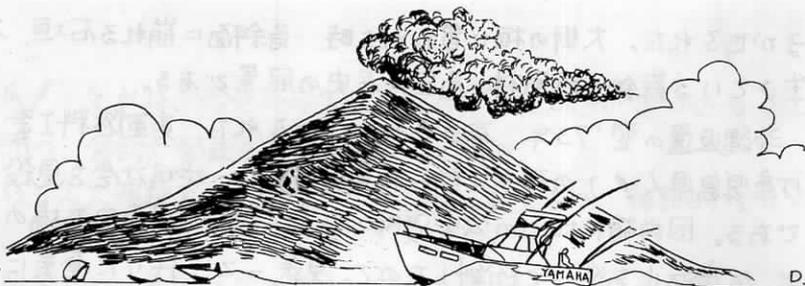
このように、視界を拡げてみると、枝手久闘争現地を包んでいる状況は、全ての地域の状況と網目のように関連していて、琉球弧を、日本列島を、アジアを、そして全世界を舞台とした、神話的存在のドラマを構成しているのが見えてくる。

世界を見渡す展望タワー・月宮殿にて、神話的存在に想いを凝らしている最中、突如、耳をつんざく轟音! 嘉手納基地のファントムだ。山並を超え、水面をかすめて、戦闘訓練しつづ、たちまち翳びさる黒い影。

想像力にまさる。黒い予感!



観光ゲーム



拝啓。ヤマハ会長 川上源一さま

本誌創刊号では、山田塊セガが、公開書簡の形で、お相手願いましたが、今回も、あなたに御登場願わねばなりません。そういえば、確か'72年夏、私は「ヤマハ・スポーカ―愛用者として、貴社の諏訪之瀬島高級レジャー・ランド計画を残念に思います。若者の夢を売る企業ヤマハが、夢を奪わねばごたまい。」旨、ヤマハ重役会に、お手紙しましたが、未だに、御返事頂いていませんね。

人生相談ではありませんが、人間は自分の問題で苦しむまでは、眼覚めないものです。当時サラリーマンだった、私は、公害、社会悪などの問題には興味を持っていましたが、環境破壊メカニズムのなかの私の立場には眼を閉じていました。それこそ、ヤマハ的(進歩的)プロチアル意識です。「野生の聖地・スワノセを資本の暴力から守れ!」かつてのバンヤン・アシコラム仲間たちから、突然、とび込んできた、このメッセージが私の存在を根底からゆさぶりました。忘れていたと思っても、南海の別天地、コミュニケーションのイメージが、心の奥深く眠っていたのでしょう。結局、プロチアル生活を精算し、ボイコット・ヤマハ運動に加わりました。

私は、あなたに一面識もありませんが、私の人生コースを変える機縁を作った人物として、あなたを一生忘れないでしょう。

ボイコット・ヤマハ運動は、私に、資本・権力の本質を見せてくれました。

諏訪之瀬島売却にあたって、あなたは島民たちと実質的な話し合いを持ちませんでした。「いやなる、それでいい。しかし、島はもっと寂れるだろう。」ヤマハ社員のこの言葉は脅迫です。過疎高齢化の果に、行政に見放されて、強制的に離島し、無人島化した、あの臥蛇島を、諏訪之瀬の人々は眼のあたりに見ているのです。

行政も行政です。十島村当局は、島民たちに相談も無く、買収交渉に乗りました。村有地売却を決議した村議会では、諏訪之瀬島民たちは、有権者不足で、発言するチャンスもありませんでした。請願も、紹介議員がいなるとの理由で却下しました。県知事のお膝元鹿児島市内に役所を置いた、村当局が、辺境のトカラ列島住民の生活感情から遊離してしまうのも当然だったでしょう。

ヤマハは、私にとって、現代商業文化の生きた教材でした。

「公害を出さない、平和産業」、これがヤマハのPRでした。住民を無視して一方的

に開発を強行し、工事を急いで労働災害犠牲者を続出させた。ヤマハが平和産業とは、聞いてあきれます。武力侵略にし、無血侵略にし、侵略は侵略です。武力にし、資本にし、更に暴力です。

八重山では、300隻ものヤマハ・レジャー・ボートを走り廻らせる、フリーナー計画を巡って、漁協と対立しているそうです。三重県安曇島では、暴走モーター・ボートによる被害を心配した漁協が、漁港使用を拒否したと云う、ヤマハは告訴したそうです。漁民と対立している企業が無公害だとは、開いた口が塞がりません。当地、宇検村でも、東燃は無公害である、との触れ込みです。

「ヤマハは美しい自然を改造し、高邁な理念に基く未来の理想郷を築きます。」大地をかき廻し、珊瑚礁を噴とばし、ヤマハは諏訪之瀬島を高級レジャー基地に改造しました。世界中のヒッピーも夢見た南海の別天地、「焼島」、「東支那海の自然灯台」と異名をとる、活火山の島、諏訪之瀬は観光資源として、売り出されました。

今では、コミュニケーション「バンヤン・アシラム」の辺りを新婚さんがウロウロしているそうです。かつての、孤高スワノセ・ヒッピーたちも、あなたのレジャー王国に包囲されて、観光アイヌやインディアンのような存在になってしまったのでしょうか。

私たちはユートピアを失いました。運動の低迷と共に、ヒッピー世代の多くも、「やさしいかくめい」的コマーシャルイズムに陥りました。ボイコット・ヤマハ運動第一期は、資本の物理的な勝利で終わりました。

失業圏に代って、現実的世界が見えてきました。「闘争のなかにしか、自由は存在しない。」と知って、奄美・枝手闘争現地にナロードニキしました。運動第一期が終ったといっても、闘争は終わりません。新しい舞台を得て、新しい視点から、あなたにムカリ続けます。琉球弧を見渡す視野のなかに、いせ心もなく、ヤマハが眼に入るのです。

諏訪之瀬島レジャー基地計画が浮上したのは、'72年であり、沖縄施政権返還の年にあたります。日本列島改造ロッキード内閣が成立した時であり、「南西諸島」開発ブームが始まった頃です。琉球弧全域を壮大な観光基地ネット・ワークで結ぼうという、あなたの、「南西諸島」海洋レジャー圏構想は、同地域のエネルギー基地化、自衛隊基地化と、同時進行的に重なり合っていますね。あなたが誇る、「未来の理想郷」には、石油タンクと自衛隊が欠かせないようです。

観光パラダイスの看板の後ろでは、ハワイは核戦略基地です。あなたの「理想郷」は、何を隠そうというのでしょうか。

ヤマハ海洋レジャー圏構想を地図上で追ってみると、非常に面白いことに気が付きます。ヤマハ高級レジャー基地計画は琉球弧の全域に広がるといっても、北端の薩南諸島、トカラ列島、南端の八重山諸島に片寄っています。欠落した奄美群島、沖縄諸島、宮古諸島には、異状な観光ブームに湧く議論島に続く、大衆的観光開発計画が目白押しです。

さうがに天才実業家を自認するあなたです。エネルギー基地化、自衛隊基地化計画が高

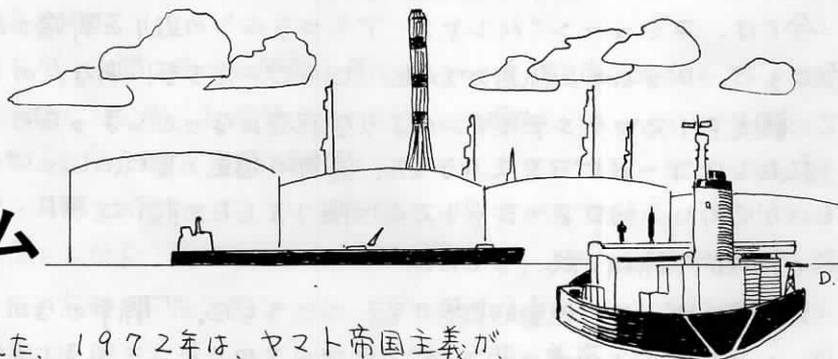
巻いている、琉球列島中央部は、戦略的に危険性が高く、大衆はともかくとして、大切な特権エリート会員様をお招きできない、という訳でしょうか？

ついでに申し添えておきましょう。ヤマハのボート、エンジンは、そのまま、軍用途に使えますね。楽器生産の精密な木工・金属加工技術は、すぐにも、兵器生産に応用できるとも聞いています。加えて、港、空港、宿舎、道路、通信設備などを備えた、レジヤ一基地は、「スワッ 有事！」ともなれば、いつでも軍事基地として、徴用できるそうですね。現代では、戦争と平和の区別も無意味になってしまったようです。

琉球弧を覆っている状況を見渡す時、自衛隊、エネルギー基地計画となるので、ヤマハを筆頭とする観光資本の役割は見過ごせません。私たちはボイコット・ヤマハの志を捨てる訳にはいきません。私たちの声は、荒野の叫びとなって、人民の森に木霊し、あなたの偽善に満ちた意識を貫いて、心の最深部を撃ち続けるでしょう。

枝手久闘争現地にて、新石器紀元40079年2月。 無我利道場・井上利男

産業ゲーム



沖縄施政権が返還された、1972年は、ヤマト帝国主義が、敗戦後初めて国境を拡大し、資本侵略を主とした、露骨な“新”植民地主義に復帰した年として、記憶されるだろう。

太平洋戦争で軍事大国主義が全面的に敗北しても、ヤマト帝国主義の本質は全然変らない、とつくづく思う。産業主義国家として米軍占領下で出発したヤマトは、朝鮮動乱軍需景気を踏み台として立直り、日米安保体制下で、ヴェトナム戦争に加担して、高度経済成長を達成した。国民エネルギーを集中した太平洋ベルト地帯は、極めて密度の高い労働力、輸送施設、市場に恵まれて、世界一の効率の産業システムに成長した。経済大国主義の勝利である。メイド・イン・ジャパンは地球の隅々にまで浸透した。

人口集中、公害放任、インフレーションなどを原動力とした高度経済成長の結果、太平洋ベルト地帯の産業活動が飽和的極限に達した時、ヤマト産業都市文明はフロンティア拡大を求めた。内には、日本列島改造と称する、産業構造再編成、すなわち産業の地内分散と非能率的工業地帯スクラップ化計画であり、外には、経済協力と称する、低開発・低賃金諸国への資本侵略である。

沖縄は丁度この時期に返還された。自衛隊が上陸し、巨大開発が押し寄せた。“沖縄海洋博'75”の巨大プロジェクトを請負った、ヤマト資本は、たちまちのうちに地場資本

を系列化してしまつた。ヤマハ海洋レジャー圏構想にしても、東西燃料奄美進出計画にしても、いずれも沖縄返還の'72年を前後して浮上している。

フロンティア拡大は帝国主義の本質である。ここでは、石油備蓄政策を中心にして、産業都市文明の拡大志向をみてみよう。

'73~'74年の石油ショックを契機として、総資本・政府は、石油備蓄量を適正在庫の45日分から90日分に引き上げるように、石油資本に義務づけた。中東産油国の資源ナショナリズムを抑制するための、先進石油消費国の対抗戦略である。国策CTS(*)が、エネルギー危機キャンペーンに乗って、原子力開発と並んで、産業フロンティアの先頭となった。(※ セントラル・トランスポート・システムとも、セントラル・ターミナル・ステーションともいい、意味不明の言葉であるが、一応、備蓄基地、原義は戦略原油備蓄基地か?)

CTS計画は、日本列島全域に分布しているが、オイル・ロードに沿って、琉球弧が特に集中的に狙われた。鹿児島・沖縄県内には、操業中の日本石油喜入基地、ガルフ平安座島CTS、着工済の三菱石油金武湾CTSを含めて、ざっと見渡しても、15ヶ所ものCTS計画がひしめいている。しかも、志布志湾、金武湾コンビナート、枝手久島石油精製基地などの巨大開発計画がCTS計画に付随している。正に琉球弧油費め計画である。

宇井純氏によれば、沖縄・奄美地域の合計人口は110万程にしか過ぎないのに、同地域での石油備蓄計画量は、日本全体の総消費量30日分にも達する。また同地域内での現在の石油精製能力は域内消費量の4倍であるのに、同地域のガソリン価格は日本一高い。

限りなき拡大が帝国主義の夢だ。莫大な財政補助を注ぎ込んで、民間備蓄が目標90日分が達成に近づいた。すると政府は石油公団による国家備蓄20日分を立案、たまたに突



金武湾埋立開発構想

(日本工業立地センター作成)

- ①石油・化学 (三菱・64万坪埋立て完了。CTS着工済。)
- ②電力・アルミ
- ③原子力・石油
- ④化学・食品・レジャー施設
- ⑤輸送関連公共埠頭
- ⑥機械・雑貨
- ⑦海洋産業 (造船・海洋構造物)

凡例 ■ 埋立完了区 ▨ 埋立の具体計画進行中 □ 埋立構想区

行に移した。太平洋上タンカー備蓄(昨年11月開始)、
 橘湾タンカー備蓄(12月開始)、三菱重工が提案してい
 る上五島洋上タンク備蓄などがこれである。今度は長
 崎県を始め、山口・九州北部が集中的に狙われている。
 これは、造船不況克服を名目としながら、日「韓」軍
 事一体化を企んだ東支那海大陸棚共同開発協定の発効、
 また中共が近代化路線に転じて東支那海沿岸油田共同
 開発の誘い、などに対応する処置である。私達の視
 野も、琉球弧の連帯から、環東支那海へと広がってい
 けり。

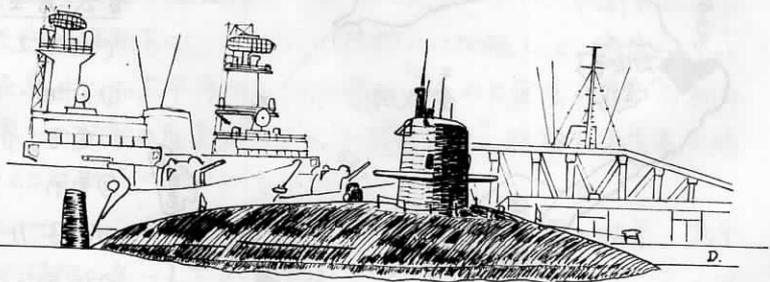


フロンティアはJSに拡大する。110日備蓄から、(毎日新聞 78.5.20日付、たし、枝久島CTS)
 120日、150日に、今では180日の声まで出
 ている。今度は海外だ。国境越えてオイル・ロードを南進して、タイのクラ地峡パイプ・ラ
 インCTS計画、ミクロネシアのバタム、パラオ島CTS計画、インドネシアのロンボク
 海峡CTS計画などが目白押し。パラオCTS計画は、日米共同事業のパラオ・スーパー
 ポート構想の一環であり、アメリカ新太平洋戦略に基づく米軍基地計画と一体である。

太平洋ベルト地帯での集中効果によって日本経済は発展したのに、消費地から遠く離れた
 辺境のCTSやコンコラート計画は経済法則を無視している。また、世界的には原油が、
 国内的には石油製品が生産過剰であるというのに、CTSやコンコラート計画を急ぐのも
 不可解である。

経済法則を無視するのが“国策”である。琉球弧エネルギー基地列島化政策は、ヤマト
 帝国主義の総合安全保障政策、すなわち“新大東亜共栄圏”構想の一環であり、在沖縄自
 衛隊増強と共に、南支戦略を構成している。

軍事ゲーム



72年の施政権返還以来、自衛隊の沖縄進駐が続いている。金武湾の西隣、中城湾では
 流通港計画を装って、軍港計画が浮上している。アメリカ帝国主義がヴェトナムで敗北し
 て、米軍をアジア大陸から撤収し、日本-台湾-フィリピン-インドネシア-タイ-エコーガ
 ルシア(インド洋)を結ぶ島嶼防衛線に主力を置く。アメリカの新太平洋戦略との関連で、
 自衛隊南支戦略がヤマト帝国主義の総合安全保障政策の支柱となっている。

在沖縄自衛隊が増強されているのに、那覇市街では刑服姿を見かりないという。沖縄攻
防戦で日本軍に見殺しにされ、また場合によってはスパイとして虐殺された。沖縄人の“
特殊”県民感情を配慮するという名目で、深く、静かに潜行しているのだ。軍事が秘密の
ヴェールに包まれていて、国民は知る権利の上でも判断されている以上は、各地域のどん
な小さな情報でも、権力の野心を露くのに必要である。

それでは、私たちが知り得た事実に対して分析してみよう。

鹿児島県内で、自衛隊施設入隊(定員500名)の誘致陳情合戦が、不況対策、災害対
策として、操り展げられていたが、川内原発着工の直後、川内市進出が決定された。原子
力施設、災害対策、そして自衛隊。迫り来る核保守社会を暗示しているわけなのか。

災害対策。従来はこれが自衛隊存続の主要な名目のひとつとされていたが、今では増強
の名目として、不況対策と並んで、多岐に活用されている。名瀬市の自衛隊誘致運動も、
災害対策、不況対策が名目である。

奄美では、もうひとつの名目がかまかり通っている。ハブ対策である。一昨年、徳之島で、
ハブ掃討作戦と称して、自衛隊部隊が上陸用舟艇と大型輸送ヘリで上陸し、火炎放射器で
原野を焼き払い、ブルドーザーで大地をひかきまわした。この盛大な上陸戦闘デモンス
トレーションの戦果はハブ14匹とか。

瀬戸内町の離島、与路島ではもっと無気味な動きがある。ハブ全滅作戦と称して、自衛
隊が島を思うままに改造している。すでに一周道路に加えて、島の中心で交差する縦横断
道路、そしてヘリポートが完成している。一説には、鹿屋航空自衛隊基地の射爆場である
という。丸に十の字のマークは標的デザインだからだ。爆弾の実射。これは軍需増大、す
なわち不況対策となる。

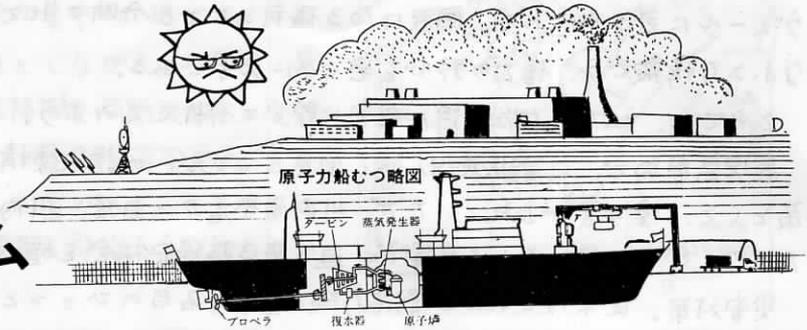
瀬戸内町・加計呂麻島、薩川湾には原船“むつ”の母港誘致の策謀がある。“むつ”條
理港佐世保も軍港であるし、瀬戸内海峡も帝国艦隊の軍港地帯だった。中近東から日本列
島まで長く延びているオイル・ロード防衛が、総合安全保障政策の重要な要素となりつ
たことからも、エネルギー基地化した奄美が戦略防衛拠点として重視されることは
間違いない。

米「韓」合同演習「チーム・スピリット'78」の直後、朝日
新聞西部版は不思議な事件を報道した。対島の沖合、領海外で
「韓国」の小漁船が火災を発生。まっ先に現場に現れたのは「
韓国」対潜哨戒機だった。それが、航空自衛隊防空識別圏内だ
ったので、板付基地からファントム二機がスクランブルに向っ
たところ、哨戒機は立ち去った。その一部始終を米軍の大型ヘ
リが見ていた。「小さな事件で日米韓三軍が大騒ぎ。米軍の朝
鮮半島撤収に伴う東支那海の緊張を表している。」とのみ、朝
日は論評していたが、何とも不思議である。

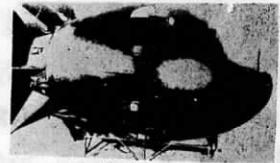


日「韓」東支那海大陸棚共同開発協定が発効したが、これに伴って、日「韓」両軍が東支那海で共同軍事行動をすることは明白である。日「韓」両軍が一体化するという重大な側面からは、マスコミはこの協定を論評していないのも不思議である。

プルトニウム



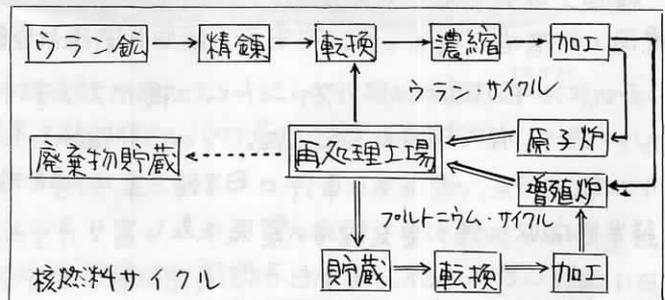
プルトニウム 239。原子番号94の超ウラン元素。半減期24,400年。原子炉内で分裂性のウラン235が核連鎖反応すると、非分裂性のウラン238が中性子1個を吸収して、分裂性のプルトニウム239に変成する。プルトニウムはウランと共に原爆材料であり、広島原爆はウランを、長崎原爆はプルトニウムを使用していた。プルトニウムは100万分の1gの体内被爆で死に至る肺ガンにかかるという、想像を絶した猛烈な放射性毒物である。自然界には存在しないプルトニウムは、当初から原爆製造を唯一の目的として開発され、異界の大王(冥王星)プルトにちなんで命名された。文字通り、現代帝国主義の悪魔が結晶した、人工物質である。

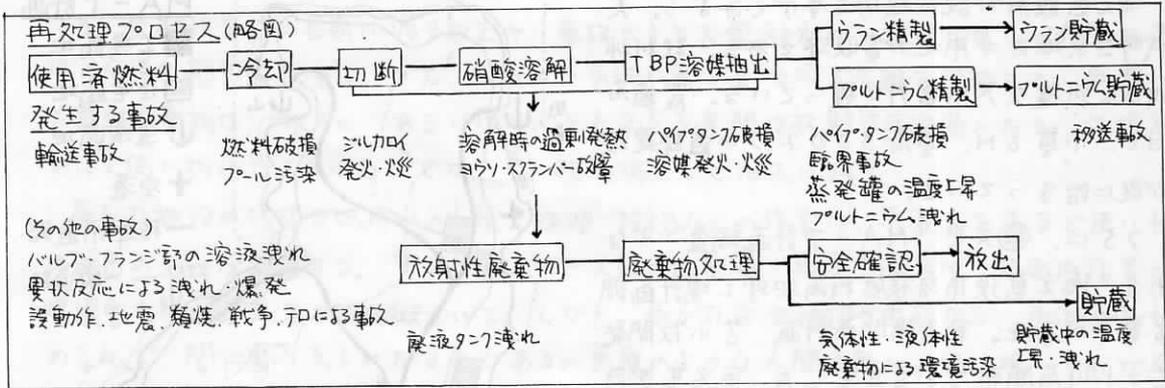


長崎原爆 プルトマン

原子炉から取り出した使用済核燃料から、燃え残りのウランと、新しく成性したプルトニウムとを、死の灰のかたまりから化学的に処理して、分離回収するのが、使用済核燃料再処理工場の役割である。ウラン、プルトニウムは、転換加工されて、再使用にまわされる。これを核燃料サイクルという。残った死の灰、高放射性最終廃棄物は、安全な処分の方法もなく、永久に保管しなればならない。

有限であるウラン資源を長くもたすためには、燃やせば燃やす程に新しくできてくる、打出の小槌のような、プルトニウムを有効に利用しなればならない、と政府、原子力業界、御用学者は宣伝する。しかし、プルトニウムを有効に燃やすために必要な、液体金属ナトリウム高速増殖炉は、現在でも危険視されている軽水炉よりも、桁違いに危険な技術であり、実際には実用化の目途も立っていない。すると、プルトニウム生産貯蔵の本当の狙いは、原爆製造以外には考えられない。プルトニウム5kg + 資金300万円 = 長崎型原爆1個、と云われている。大学生でも原爆を設計する時代である。





原発の何十倍もの死の灰を扱い、しかも、ジルカロイ合金被覆をブツ切にしたうえで、それを複雑な工程を経て、化学処理するところが、この工場を人間の手には負えない極度に危険な存在とする。汚染のない化学工業は不可能であり、放射性汚染は死に直結し、しかも子孫にも遺伝的影響を残す。従業員の日常的被曝、気体性・液体性廃棄物の環境への日常的排出、配管系の故障、化学火災、臨界暴走・爆発、その危険性は果しない。

しかも、核再処理工場は単独で建設されるのではなく、転換工場、加工工場、廃棄物貯蔵施設など、関連施設を伴っている。これが、核パーク(総合核エネルギー基地)である。転換・加工工程では、微粒子粉末となって空中に飛散しやすい酸化プルトニウム金属を扱う。プルトニウムによる、労働者の被曝、環境汚染が心配されている。貯蔵施設では、高放射性廃棄物溶液タンクの破損が心配されている。これは、何十年間に一度新しいタンクに入れ替えるが、何十万年間が保管しなければならぬ。

東海村の国営核再処理パイロット・プラント(0.7t/日処理能力)でさえも、故障続きであり、恐ろべき汚染が、工場内・周辺環境に拡がっているというのに、商業規模の民営工場が計画されている。通産省はすでに4ヶ所の候補地について机上検討を終えていて、立地環境調査も近く実施するという。そのいずれもが離島であるが、徳之島が最有力とみられている。徳之島関係調査費として、すでに60億円の予算が組まれた。



海岸から見た東海村再処理工場

またしても"離"島である。通産省発表を報じた、日刊工業新聞は、「本土では立地不可能」とあると、離島住民への人権無視を隠しもしなかった。

とうとう、まやがった! ヤマハのスポーカーから、死のメロディ。奄美人民の宿命であり、私たちの運命だったのか。プルトニウム、死との対決。プルトニウム1gの空中放出で半径60KMの区域が汚染されるといふが、私たちの枝杵島は、工場立地点からT度60KMに位置している。

徳之島最有力説の根拠を挙げてみよう。天城町三京地区の用地が買収済である。秋利神川の水利権を九州電力が握っている。農道名目で、巾員6M、負荷300トンの道路建設が既に始まっている。

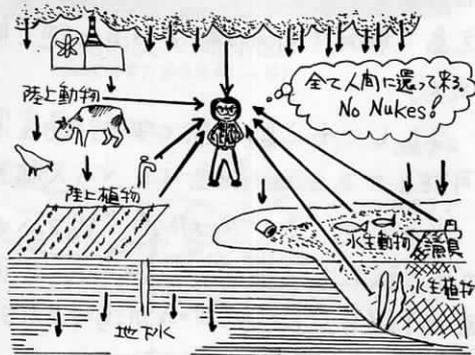
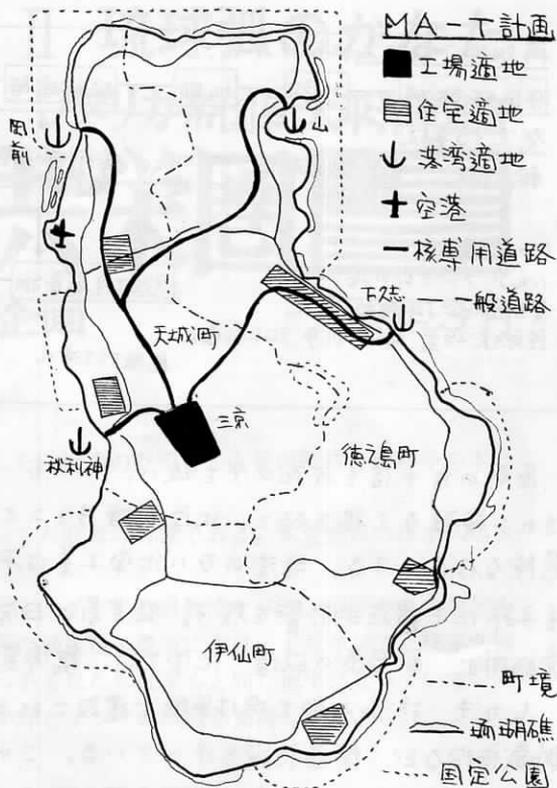
さらに、秘文書“MA-T計画調査”すなわち“徳之島使用済核燃料再処理工場計画調査書”の存在。新大隅開発計画、苦小牧開発、むつ小川原開発などを立案した、匿名高千日本工業立地センターが'75年に作成した、この報告書は、①調査の概要、②立地条件、③住民意識調査、④立地可能業種、⑤核再処理工場の規模(5トン/日処理能力)、⑥港湾施設(3,000-5,000トン級4ヶ所)、⑦道路計画(1種4級規格、300トン負荷、片側巾3.5M2車線)、⑧住宅地計画(住宅の質、生活環境施設とも高水準なニュータウン構想)、の8項目について詳しく報告している。

徳之島には石灰岩層が広大に分布していて、石灰鉱山跡もあり、坑道内に最終廃棄物を保管(廃棄?)する計画のようである。

徳之島は、日本列島太平洋岸からも、日本海沿岸からも、使用済核燃料を海上輸送するのに便利な地点に位置している。また、軍事基地・沖縄の背後にあって、防衛上も有利である。

徳之島以外の候補地について立地条件をみてみよう。北海道奥尻島は仮想敵国ソ連と国境を接していて論外である。山陰の隠岐島は日本海の制海権をソ連海軍が握ることを考えると問題がある。太平洋の沖大東(ラサ)島、および噂々のあった西表は海上輸送路が長くなり、防衛上も徳之島より不利である。ラサ島には労働力もないし、用水源確保の点でも疑わしい。秋田県東通村では“むつ”の前科がある。

核再処理工場から日常的に排出されるクリプトンなどの気体性廃棄物にけでも徳之島全域を汚染し、住民を直撃する。東海村周辺でも、すでに住民の発病率が高くなっている。火災事故などによるアルトニウム的大量空中放出とでもなれば惨事ははかり知れない。廃液として海中に放出される放射性毒物は、食物連鎖を経て高度に濃縮され、やがて人体に蓄積



する。放射性毒物の長期に渡る放出や、事故による大量放出は、黒潮に乗って北太平洋全域の海洋生態系を汚染し、また、ジェット気流に乗って地球大気圏を汚染する。貯蔵された最終廃棄物は、永年に、あるいは少くとも25万年間は放射性汚染源となる。工場施設自体も使い物になるなくなってからも、汚染源として永久に残る。

原子力施設の汚染区域内での点検・修理・除染などの作業は、労働者をまるで使い捨ての雑布のように消耗する。すでに驚くべき人数の従業員・日雇労働者が、原発内作業で被爆傷害を受け、死者も続出している。しかも、原子力安全神話の建前から、労働災害も認められず、闇に葬り去られたままである。悪魔のような人間差別と人間破壊、それが原子力「平和利用」の現実である。

「MA-T計画調査」によれば、「徳之島からの中高卒県外新規就職は毎年760人、奄美群島全域では2,000人、これに加えて、徳之島からの出稼者は600人であり、労働力確保は容易。」死と引き替えの労働である。奄美総労働力の総汚染！ 奄美全人口の遺伝子障害！

MA-T工場の規模は東海村の7倍。再処理能力は1日に死の灰5トン。生産されるプルトニウムは1日で長崎型原爆3発分、1年で実に4,500発分！

徳之島北へ350KMには、科学技術庁の種子島宇宙センター！

「原子力が高度に開発されることで、実は核軍力の潜在性も高まる。また一応、人工衛星の技術は、次の時代の戦略兵器の運搬手段として不可欠である。」(石原慎太郎) 原子力と宇宙の平和利用の名のもとに、国際軍事ポーカー・ゲームの危険な切れ、(潜在的?)核戦力を開発して、誰を脅迫しようというのか!?



徳之島は朝鮮半島からも核物質海上輸送に便利な位置にある。しかも、日「韓」共同開発区域にも近く、「韓国」軍にとっても防衛上有利である。朴独裁政権の軍備国産化と日系資本が担っている現状から考えても、朝鮮人民の頭上に炸裂する核兵器がメイド・イン・ジャパンであっても不思議ではない。

核再処理工場は戦略的軍事施設なので、全島が要塞化し、カービン銃、戦車、ミサイルで厳重に防護されるだろう。与路島ハブ対策事業の隠れた意図として、射爆場造成説と共に、要塞建設準備説も有力である。

徹底的な機密保持。離島が再処理工場立地に選ばれる理由のひとつがこれである。企業機密、軍事機密、機密の籠屋は無敵である。アメリカのカーマギー社(核燃料製造)のカレ

ン暗殺事件が、それほどのようなものか教えている。事故災害なども機密とされ、被爆犠牲者は隔離され、葬り去られるだろう。内部と

風車

めまぐるしい世の中、の動きのなかで、すっかり忘れ去られたかたちになったが、カレン・シルクワットの名は、一時新聞誌上をにぎわせた。

彼女はアメリカの核燃料会社カーマギー社の技術者で、労働者の活動家だった。彼女が高速道路で、交通事故死をうけたのは、四年前のことだった。彼女は、カーマギー社のさまざまな放射線作業を告発する文書をもつて新聞記者に会いに行く途中だった。「事故」の現場からは文書がなく、厚くなった。一時はFBIも調査を始めたが、いつの間にかうやむやになって現在にいたっている。

ところが最近のアメリカの科学誌によれば、当時カーマギー社がウエスチング・ハウス社に納めていた高速増殖炉用の燃料棒に欠陥品の疑いが出てきた。とすれば、彼女はさまざまな品質管理や試験結果のねつ造の裏情を知っていたために抹殺されたのかもしれない。

彼女の死とそれにつきまとう底しれぬ無気味さは、決して過去のものではない。原子力社会は無数のカレンを生み出すのではないだろうか。第二、第三のカレンを日本で生み出してはならない。(T)

外部とを問わず、告発者は消される危険さえも覚悟しなければならぬだろう。

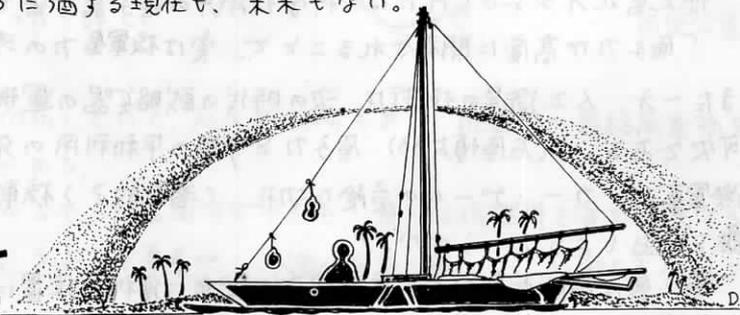
ゲリラによる破壊工作、核ジャック対策を口実として、核特別警察軍が設置され、要塞化した核センター施設を厳重に警備し、社会を徹底的に管理化に置くだろう。死と隣り合わせの高度な文化生活と引き替えに、社会は収容所化するだろう。スパイ網が常に住民を監視して、コンピューターが管理するだろう。出入島者も全てチェックされ、尾行されるだろう。徳之島だけでなく、奄美群島全域が、今日三埋塚で見られるような、戒厳令化に置かれるだろう。核施設は全国に分布するので、奄美群島でのフルトニウム保安社会実験の結果は全国に波及するだろう。

おともしきフルトニウム社会。それは、死の秩序が支配する地獄だ。静かに進む“死の灰”輸送行進。聴き耳たてるコンピューター。空睨むレーダー。突立つミサイル。滲み出す死の滴。技術者のすり切れた神経。腐食した肉体。時を待つステンレス製タンク。

こうした光景は、現実ではなくて、近未来の悪夢だろうか。たとえ今の瞬間にも、フルトニウムは増殖を続け、被爆事故は増大し、環境汚染は拡大している。一方では、文化は画一的に軽薄化し、社会は多層的に重層的にファクション化してある。

フルトニウム社会、それは、見せかけの安定と繁栄の名のもとに、現在進行している。聞おう！ ともなくば、生きるに価する現在も、未来もない。

人民を求めて



迫り来る、MART計画との対決は、奄美人民のみの闘争ではない。シマントユウ（奄美人）、ウチナントユウ（沖縄人）、ヤマトンテユウ（大和人）全ての闘争であり、読者である、あなた自身の闘争なのだ。

全国各地で展開する反原発現地住民闘争、東海村周辺の反核・反再処理闘争、青森から長崎へ、そして奄美などの“複数母落”候補地へと引き継がれていく反“むつ”闘争、また、都市住民の反核非暴力直接行動と反原発市民運動、これら全ては、現在でも、「原子力はいやだっ！」意識で結びあっているし、やがて、民営核再処理工場阻止闘争に収斂していくだろう。

今こそ、全てが脱皮するべき時である。地球大規模の悪夢的な状況を目前にした以上は、反公害・反核意識は、必然的に、ヤマト巨大文明解体を志向して、トータルな革命意識に成長する。フルトニウム社会への抵抗は、死の秩序を夢見る狂気の文明を、瀬戸際ギリギリで拒否して、新しい世界



コンシュートピア創造群

若きラーヴァナは、昔行のかいあって、宇宙神ウイシユヌの意に適う。

「願いを申してみよ。」 「私は死にたくありません。」 「それは無理だ。生まれたものは死ぬ。」 「それでは、私を天の支配者にしてください。」 「よろしい。適えてあげよう。」 「支配者となるために、誰よりも賢いように十の頭と、誰よりも強いように二十本の腕を授けてください。」

天下無敵となったラーヴァナは、天に攻め入り、神々の王インドラをも撃ち倒した。神々は悪魔の都ランカーの奴隷となった。苦しみが天地に満ちた。

地球総汚染の時代である。

黒潮にオイル・ボールが漂う時代である。

いつのまにか、原子炉衛星が頭上を回る時代である。

インド神話のふるさと、聖なるガンジス河にフルトニウムが流れる時代である。CIAが、中国の核実験を探知する目的で、ヒマラヤ山中に設置した、フルトニウム電源の観測器機が、放置されているうちに、雪崩にあって、ガンジス河に転落したという。

インド自体が核実験をする時代である。

それにしても、何という凄じい時代に全を享けたのか！ 個人の死なら、まだ分る。人類の死、地球生態系の死に立ち合えというのか！

ヴァルミキは唱う――

苦しみは祈りとなった。神々はウイシユヌ神に訴えた。

「ラーヴァナは世界を滅ぼします。救いはないものでしょうか。」 「よろしい。私は人間界に生まれましょう。あなたをサルになって生まれなさい。あなたと私とで、彼を討ちましょう。」

神話ラーマ・ヤーナでは、人民の神ラーマが、サル・ゲリラ軍と連帯して、魔王ラーヴァナを打倒し、世界は解放される。

しかし、この死。フルトニウムが支配する世界！

「エネルギーは高所から低所に流れ、平衡状態に達する。全ての活動エネルギーが平衡状態に達した時、宇宙は存在をせめる。これがエントロピー増大の法則である。」

「エントロピー増大法則に抵抗するもの、これが、生命の定義である。」

死に抵抗する生命！ 自身と、人類と、地球生態系との死に打ち勝って生きること！

ここに永夏の謎を解く鍵があるだろう。生きること。ムガリ続けること。ヤマハに、石油文明に、フルトニウムに、全てにムガリ続けること！

南無(とうとがなし) 枝手久大明神！ 3気オーム 人民の神ラーマ！

弟子――

「神が創造したもうた世界に、悪が存在するのは何のためでしょうか？」

シュリー・ラーマクリシュナ――

「物語を面白くするための！」